

2023年1月23日(月)

老球の細道712号

創意工夫こそ指導者の醍醐味

会津バスケットボール協会 室井 富仁

高校教員になったばかりの頃、ラジオ体操のような準備体操から始まるありきたりの体育授業や教科書を読んで解説するだけの保健の授業に飽き飽きしていた。バスケットボールの指導も毎日同じことの繰り返しでマンネリ化の危機に陥っていた。その頃、バスケットのある講習会で元経団連会長土光敏夫の座右の銘「3つの意(熱意、誠意、創意)」を聞いて「創意工夫」の必要性が閃いた。「室意」を加えて「4つの意」としたのはこの時。

その時に出会った2冊の本が、その後色々な場面でアイデアを産み出す原理原則を教えてくれた。一つはA・E・オズボーン著『独創力を伸ばせ』(ダイヤモンド社)。有名な「ブレインストーミング」を提唱したもので、良い悪いの批判はしない、自由奔放に考える、量を求める、既存のアイデアをちょっと変化させたり結合させてみるなどの4原則を教えられた。もう一つは民族地理学者の川喜田二郎著『発想法』『続・発想法』(中公新書)である。色々な情報を組み合わせ、整理し、アイデアが熟成すのを待つことなどを学んだ。新聞の切り抜きなどたくさんの資料を整理するファイル方法などは現在でも続けている。

最近読んだ哲学者の梅原猛著『日常の思想』(集英社)の中にもアイデアを産み出す「発見(創造)の覚え書き」なるものが記されていた。ヒントはまさに「青い鳥」である。

- 1・人間は知らないうちに1つの色眼鏡を通じてものを見ている。そして発見(創造)とはその色眼鏡から自由になることである。常識を作ったのは過去の人である。
- 2・発見の前提は疑いである。常識のあいまいさを批判することから始まる。
- 3・疑いには裸の心と勇気が必要である。疑い続けるには勇気が必要で、人を孤独にする。
- 4・発見には想像力が必要である。どんなことでも心に浮かんだことは大切にせよ。その十の一つは使える。
- 5・広い知識が必要である。想像力には自由な心、自由な生活態度が必要であるが、知識のないところに想像力は生産的にならない。
- 6・発見はある日突然起こる。それは向こうからやって来る。それは一種の直感で受け止めるだけである。チャンスの女神は二度後ろ髪を引かない。
- 7・発見(創造)はいったんなされれば、すべてコロンブスの卵である。素晴らしいアイデアや発見も、ひとたび衆目に触れた後には非常に単純で簡単に見えてしまう。
- 8・発見や創造を可能にするのは、たえざる認識の努力、心理や美に対する強い愛である。

現在あちこちでバスケットボールのクリニックを行っているが、一番の楽しみは今までにない練習ドリルを開発することである。選手が楽しく熱心に取り組むことを想像すると、ドリルを考える「産みの苦しみ」(経験はない)はあるが、それこそ指導者の醍醐味である。

アイデアはある日突然やってくる。それに気づくために「スリー・マン」で心の準備。「ミラー(鏡)マン(何でも取り入れる)」「ギモンマン(?)」「オドロキマン(!ブラボー)」。